

琉球大学学術リポジトリ

首里城正殿の龍の配置と様式についての考察

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 貞雄, Nishimura, Sadao メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/939

首里城正殿の龍の配置と様式についての考察

西村 貞雄

A Study of the Arrangement and Style of the Dragons of the State Chamber in Shuri Castle

Sadao NISHIMURA *

ABSTRACT

The patterns and motifs of the state chamber of shuri Castle form a unique design. A careful study of this design can, I think, teach us a lot about the aesthetic consciousness of the era in which Shuri Castle was built and the social context of its construction. Powerful paintings and sculptures of dragons and lions constitute an integral part of the design. In this paper the focus is on the form and style of the dragons in the state chamber, on their role in the overall design, and especially on their relation to the flamboyant globular gems.

はじめに

首里城正殿には工夫された意匠がある。その意匠には龍や獅子像等があり、絵や彫刻として効果的に表現されている。その意匠を知ることは、首里城の美意識や思想的な背景を理解する手掛かりになると考える。特に33体の龍が配置された構成にはそれぞれの様式があり、込み入った仕組みがある。また、形態の上からも優れた表現がなされているが、時代の変遷などに伴って形態が崩れ意味も理解されない状態で今日にいたっている。その一端として復元後も論争を呼んでいる阿形・吽形の対で表されている大龍柱では、「向き」の問題が未解決である。

この稿では龍に視点をあて、首里城正殿の龍の形態と様式から龍がどの様に取り入れられているかを宝珠との関係で考察する。

1. 龍と宝珠の関係

建物の持つ意味合いとそれに伴う方向性を理解するには、建物に付随する意匠を読むということが重要になってくる。なぜ、首里城正殿に龍が取り入れられているのか、しかも33体もの龍が配置されていると言う事は何を意味しているのか。龍の様式や形態を理解することは、その時代の思想的な背景を知る手掛かりになり、より良く首里城を理解するきっかけをつくることにもなると考える。

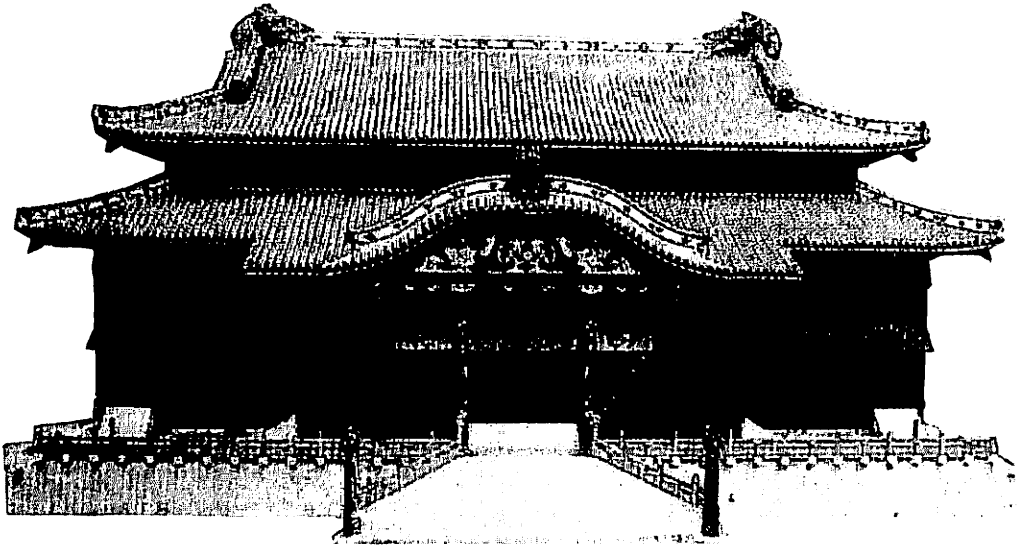
龍と虎を取り入れている「龍虎の世界」という関係はよく知られている。しかし、建物に取り入れられているのは龍と獅子の方が多い。首里城でも龍と獅子が組み合わせられている。正殿を正面から見ると、大棟の龍頭棟飾り、降棟の獅子像、唐破風の龍頭棟飾りと妻飾りの金龍五色の雲、透し

* Department of Sculpture, Coll. of Educ., Univ. of the Ryukyus.

欄間の獅子像、向拝柱の龍、正面の階段・親柱の獅子像と小龍柱、大龍柱というように大体において交互に配置されている。また、中国の紫禁城の中の太和殿では、龍と鳳凰という組み合わせもある。首里城の龍と獅子のように数多く交互に使われてはいないが、この関係は一定の決まりの下に、建物に部分的に見られる。例えば王の椅子には龍、王妃の椅子には鳳凰という図式は定型になっているようである。

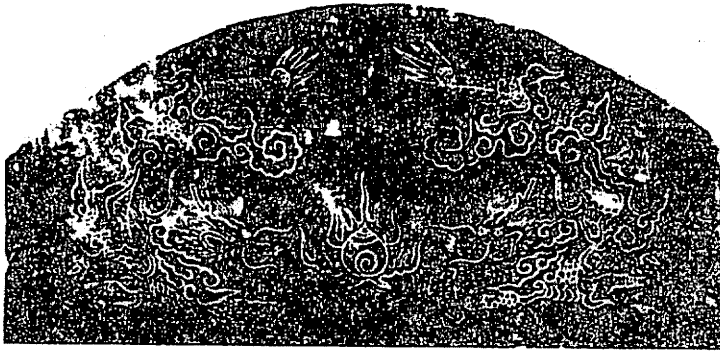
龍と獅子の組み合わせの他に、一般には鳳凰と日輪（碑文②）や龍と宝珠（又は火焰宝珠）（碑文①）のなかに瑞雲が施された組み合わせがある。この配置は、日輪や宝珠を中心に位置づけ鳳凰や龍を左右から向かい合わせ、その間に瑞雲が入る

か、また、全体にちりばめられているかになっているが、日輪と瑞雲（碑文③）という組み合わせも多く見受けられる。これらは、漆器等の工芸品や碑文、位牌等の意匠としてもよく使われる。首里城正殿では、宝珠（又は火焰宝珠）を中心に据えて左右に阿・吽形の龍が向かい合い瑞雲がちりばめられている図式が基本的に取り入れられている。この宝珠と龍の組み合わせは建物全体に配置されているが、宝珠が外側に位置づけられているものもあり、宝珠の位置によって龍の方向性も決まり、龍が守護として取り入れられたか、権威の象徴として扱われていたか、龍の配置の起因にもなってくると思われる。



平成4年に復元された首里城正殿

正面の末広がりの階段には欄干部の前に大龍柱が位置づけられている。大きな台座を取り払い、向き合っている大龍柱を正面に向けて写真合成したものである（筆者）^①。



碑文①

火焰宝珠を中心にすえて、阿形・吽形の龍が左右から取り囲むように中心に向かい、周辺には瑞雲が施されている。

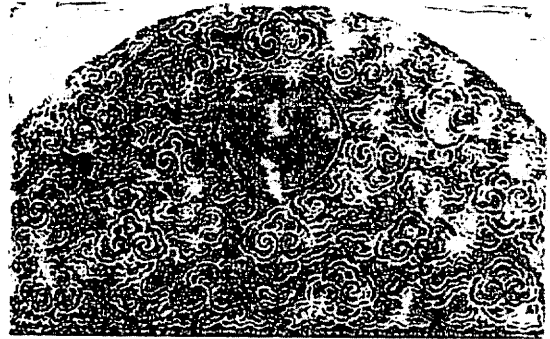
この様式は、首里城正殿の唐破風の妻飾にも取り入れられている。

宝珠双龍瑞雲文^②



碑文②

周辺に雲のある日輪を上部中心に位置づけて、左右に阿形・吽形の鳳凰が向かい合う形で瑞雲と共に配置されている。日輪鳳凰瑞雲文^②



碑文③

中心に日輪を配し、周辺には一面に瑞雲が施されている。日輪瑞雲文^②

2. 33体の龍の構成

正殿の建物には龍が阿・吽形一対の様式をとって、左右に位置づけて構成されている。その数は16対あって32体であるが、その他に1体が建物の中心に位置づけられて（唐破風上の龍頭棟飾り）33体になる。

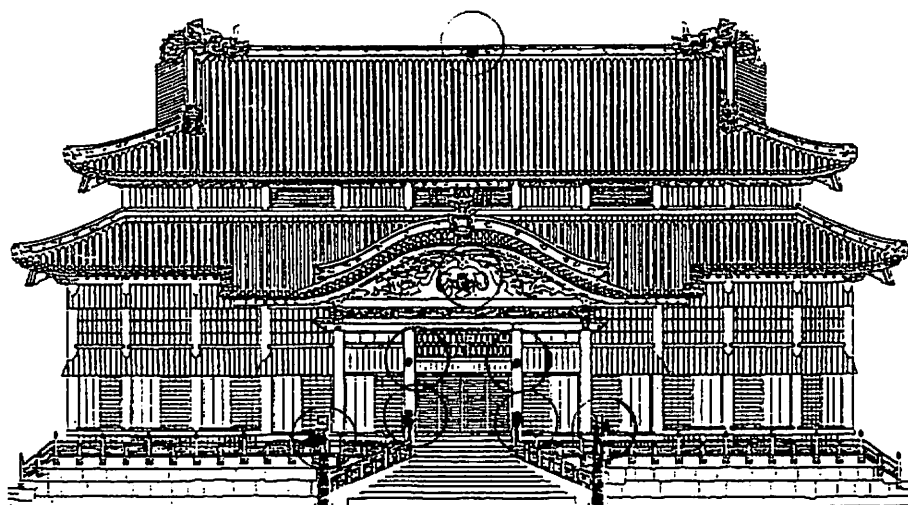
33体の龍は宝珠（又は火焰宝珠）との配置（図

①）の関係のなかで様式を作っており、その位置づけは重要な意味があると考えられる。様式は4種類あり、その配置は場所によって形態に工夫がある。その内訳について述べると次のようになる。

一つは、宝珠（又は火焰宝珠）を中心に左右から阿・吽形の龍（全身）が向かい合うように構成され、その間には瑞雲が施されている（図②）。これは一般に宝珠双龍瑞雲文という図式である。

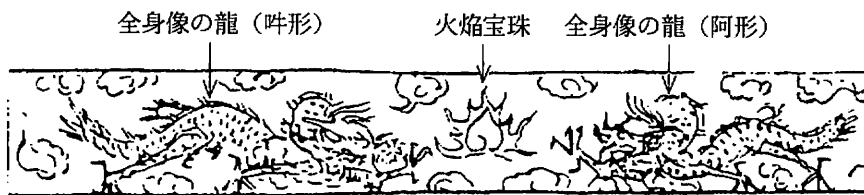
正殿の建物内部では、一階及び二階の御差床の周辺の天井額木や内規額木がこの様式（写真①）であり、また、一階の御差床の正面上の刺繍で飾られた瓔落も同様で、中心に火焰宝珠を据え、左側には吽形の龍、右側には阿形の龍が相對して、その間に五色の瑞雲が表されている。また、この様式は建物外部にも取り入れられている。正面の唐破風の妻飾りは最も華やかな箇所であるが、中心に大きな火焰宝珠を位置づけ、左右から金龍五色の雲が中心部の火焰宝珠に向かっている（写真②）。いずれも龍は横からとらえた全身像であり、

浮彫の形で表されている。また、同じ様式を取り入れながら工夫されているものに、屋根の大棟の左右に位置づけられている龍頭棟飾りがある（図③）。龍を取り入れた棟飾りは中国等に例は多いが、大きさや形態には類似するものは無く、首里城独自の風格を作っている。この龍頭は、建物内部から出てきて大棟を噛む形をとっており、頸から頭部を表した形態は迫力に満ちて中心の宝珠に向かって構えた構図を作っているが、その間には瑞雲（飾り瓦）が配置され、リズム感を与えている。



図①

○印は宝珠（火焰宝珠）が位置づけられている箇所である。建物の中心から正面（御庭）に広がりを作るように龍と関係づけて配置されている。^③



図②

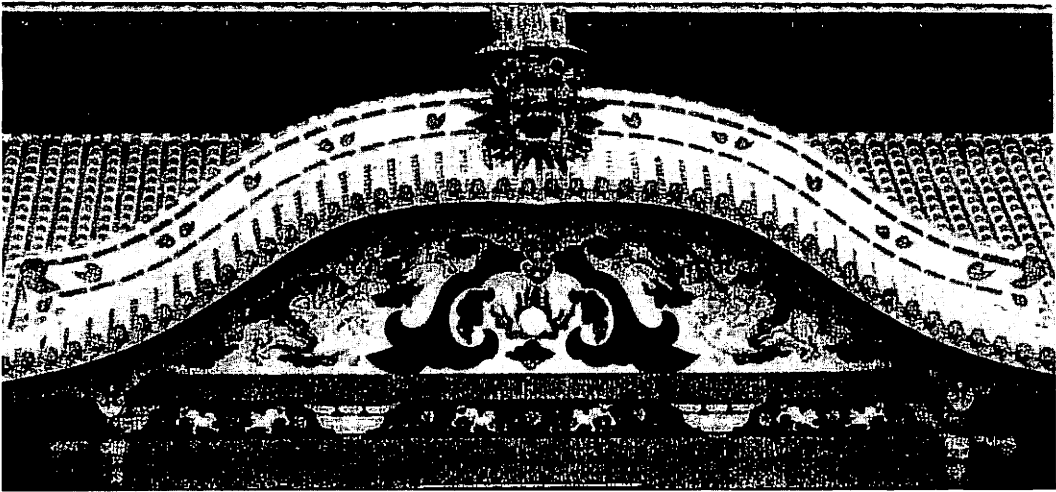
「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」より^④

火焰宝珠を中心に据えて、阿形・吽形の龍が左右から構え、周辺に瑞雲が配置されている宝珠双龍瑞雲文の図式は碑文等にもあるが、正殿の建物もこの様式が基本となって龍が配置されている。



写真①

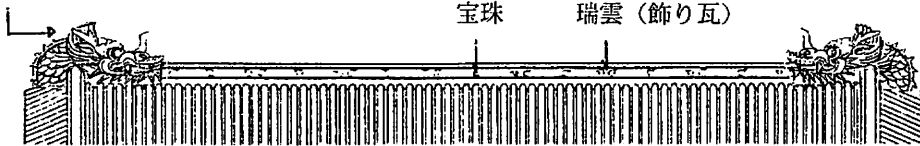
正殿の一階と二階の御差床の周辺には額木等に宝珠双龍瑞雲文が配置されている。



写真②

正殿の正面に位置づけられている唐破風にも龍が配置されている。ここは建物の中心であり、最も華やかさが必要とされる。この箇所には大きな火焰宝珠を中心に据え、それに向かって動的に阿・吽の龍が構える宝珠双龍瑞雲文の様式をとっている。

龍頭棟飾り（龍の頭部と頸で表現）

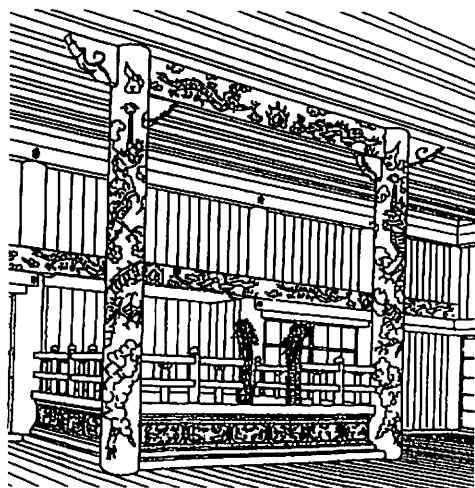


図③

大棟の龍頭棟飾りにも宝珠双龍瑞雲文をとっている。棟の左右の先端に龍の頭部を造り、胴体部は建物の内部から這い出るような暗示を与える大胆な発想を展開させている。左右から阿・吽の龍が棟を噛むように強調した構えを作っている。

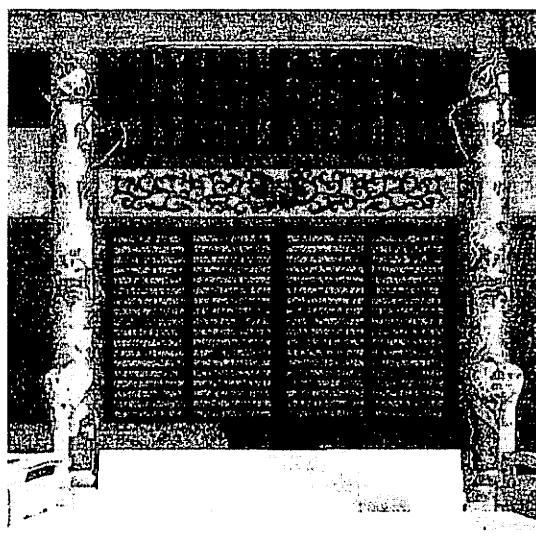
二つ目は、柱に螺旋状に巻いた阿・吽形の龍である。この様式は中国や韓国等でも見られる一般的な表し方であるが、首里城正殿では一・二階の御差床の前の柱(図④)や唐破風の向拝柱(写真③)に、絵によって表されている。いずれも極彩色で描かれ、向かって左側の吽形は左脚を上にあげて宝珠を握っており、右脚は下の方に構えてい

る。右側の阿形は、右脚を上にあげて宝珠を握っており、左脚は対応する形で下に構えている。また、唐破風の向拝柱の内側の柱には、木彫で螺旋状に彫られている(写真④)。しかし、この龍は宝珠を握っておらず、その上の妻飾りの中心部の火焰宝珠と対応させている。この様な事例は中国等でよく見受けられる(写真⑤⑥)。



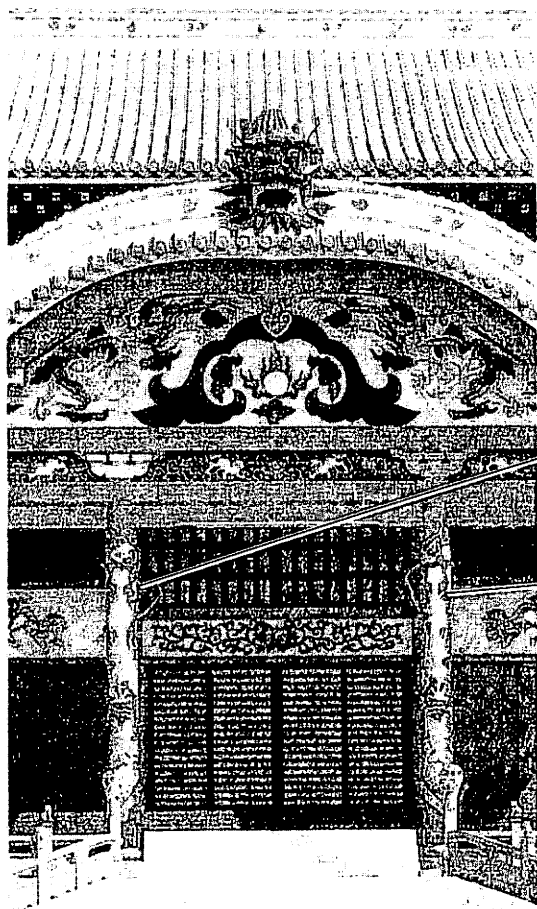
図④ 二階御差床の透視図^③
(龍柱のみ筆者修正)

正面左右の柱には、阿形・吽形の龍の絵が螺旋状に描かれている。

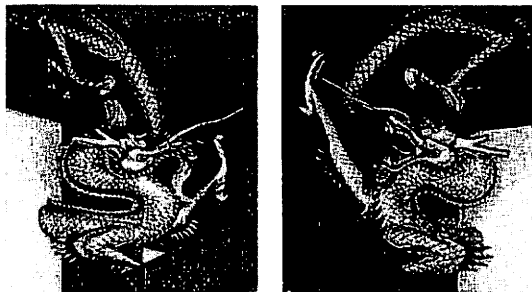


写真③ 正面階段上、向拝柱
この柱にも阿形・吽形の龍の絵が螺旋状に描かれている。

一・二階の御差床(図④)の正面の柱と唐破風の下に向拝柱(写真③)には、極彩色の龍の絵が螺旋状に描かれている。いずれも阿・吽の形態をとり、一方の前脚は宝珠を握って上方柱の中心に、片方は下に構えて内側に位置づけている。

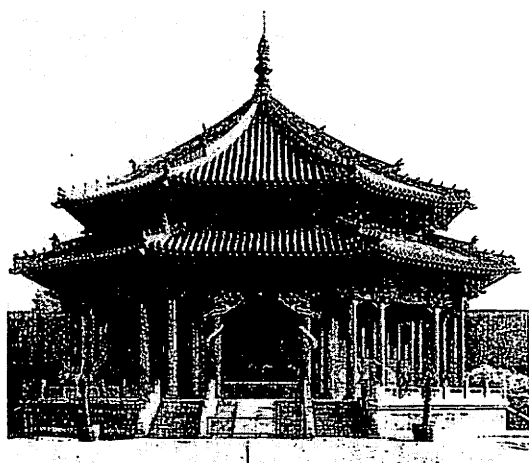


手前の向拝柱後方の木彫の龍・拡大



写真④

向拝柱の後方の柱には丸彫りの木彫がある。阿・吽の龍で、前脚を左右に広げて構えているが、宝珠は持っていない。これは上方の妻飾りにある火焰宝珠に対応するかたちをとっていると考えられる。この事例は、中国等で見られる様式である。



写真⑤ 瀋陽故宮大政御與十王亭^⑤



写真⑥ 大政殿龍柱（拡大）^⑥

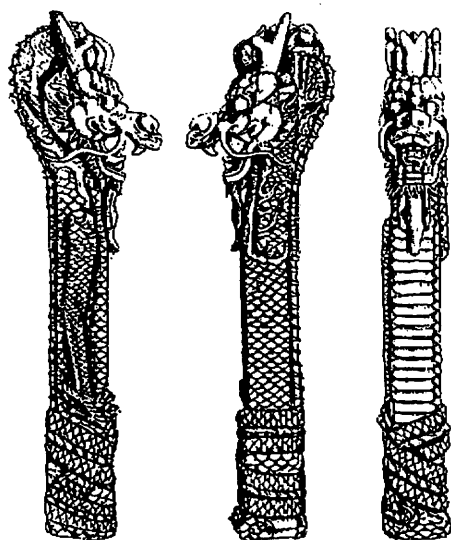
中国の事例、柱に螺旋状に構える龍は、中央上部にある火焰宝珠に対応させている。

三つ目は、正面階段の大龍柱(図⑤)、小龍柱(図⑥)と二階の御差床の龍柱(図④)の様式があげられる。この龍柱は、柱に巻き付いた形態ではなく、龍の胴体そのものが太い柱としての機能を備え、欄干(高欄)と組む構造になっている。この龍柱は、とぐろを巻き鎌首をもちあげて威嚇する態勢が柱になっている(図⑦)。つまり欄干の柱に阿・吽の形態を盛り込んでいる訳である。この発想は、おそらく首里城正殿にしか見られないユニークな形態ではなかろうか。

二階の御差床の龍柱や正面階段の小龍柱は、いずれも龍柱の背面(背骨)に欄干がつながっている事から、大龍柱もこの様式であったと推測する。これは大正12年頃の鎌倉芳太郎撮影の写真⑦や昭和10年頃の坂本万七撮影の写真⑧の大龍柱後方の柱の「ほぞ穴」の痕跡から判断でき、欄干と一体化した構造体だったと推測できる(図⑧⑨)。また、大龍柱の背面に欄干がつながって正面を向いていたと考えられるもう一つの理由として、龍柱の構えが乾隆3年に製作された石垣市・桃林寺の仁王像の構えと一致する事があげられる(写真

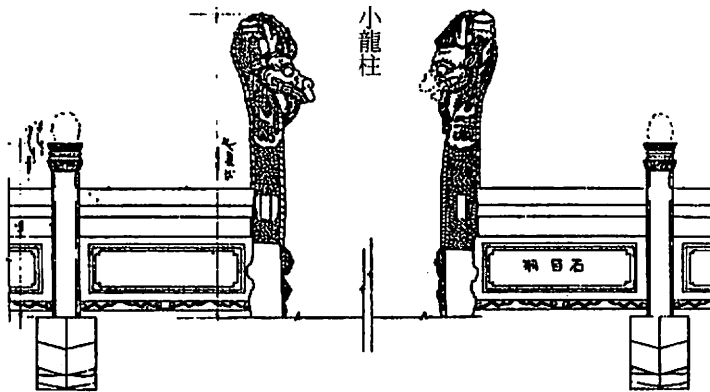
⑨)。この構えは、正面向きを裏付けるものであり、龍の流れや方向性から判断してもごく自然な形である。また、ラオスやチエンマイ(タイ)などの宮殿や寺院には、欄干部に相当する箇所には龍が這って構えを作っている(写真⑩)。この様な事例からみても龍柱は欄干の流れに沿ってその方向に向かう事が自然である。

首里城正殿の龍柱と欄干部は、構造的な造りからも関連性があり、それを推測すると、龍が這ってきてとぐろを巻き、鎌首を持ち上げて構えるという時間的な流れも感じられる。それを図式化すると龍柱と欄干は、図⑩のような構図が考えられる。欄干は龍が這ってくる見立てを構造体として石材で表現し、龍柱を、欄干の親柱として位置づけている。また、龍柱は阿・吽の様式を取り、仁王像に見られる手の構えをとり入れて、とぐろを巻き鎌首を持ち上げて構える態勢を柱の中に盛り込んでいるなど、かなり込み入った内容を持っている。激しい内容を持つ形態ではあるが、それを感じさせない抑制された表現がなされており、そこに首里城の美意識があると考えられる。



図⑤

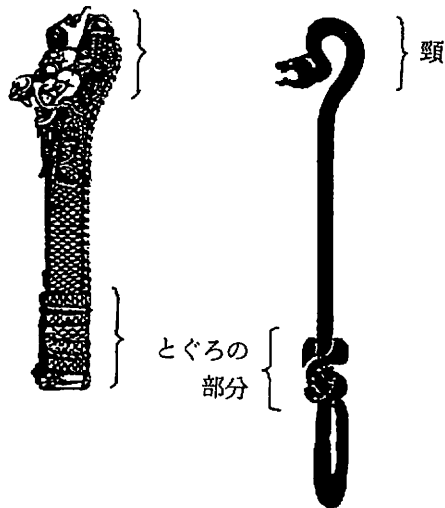
大龍柱・阿形である。左右の側面・正面いずれから見ても一般に見られない形の龍で、太い四角柱状の胴体が垂直に立ち、前脚が上下に位置づけられ、尾の下方が巻いているのが「とぐろ」と考えられるが、殆どそれを感じさせないほど柱状になっている。(西村原図)



図⑥「国宝建造物沖縄神社拝殿図」[®]

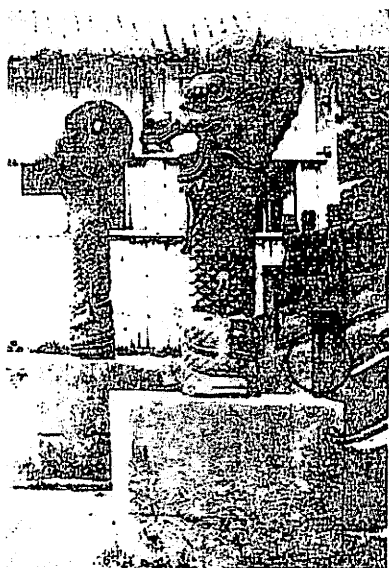
1933年 文化庁蔵より

小龍柱も大龍柱と同じ形態・形状をもっている。



図⑦

首里城正殿の龍柱は、龍が威嚇して構える態勢を柱として表現している。とぐろ、鎌首、前脚がこの中にある。全体の姿図を右に示すが、潜っている後脚は造られず、暗示を与えている。(西村原図)

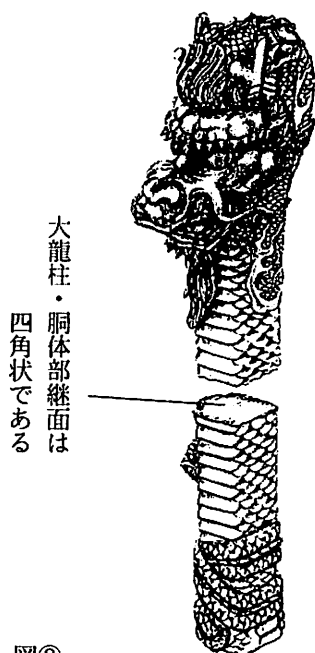


写真⑦ 鎌倉芳太郎撮影（大正12年頃）^⑦

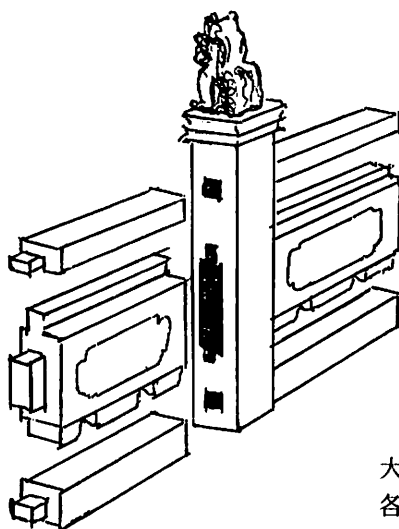


写真⑧ 坂本万七撮影（昭和10年頃）^⑧

上掲の写真には大龍柱の後方の柱に「ほぞ穴」が見える。大正時代の写真の大龍柱は正面に向かっているが、昭和10年頃の写真では向き合う形になっている。昭和の写真は、解体修理後に沖縄神社拝殿として位置づけた後の写真であり、「ほぞ穴」は埋められている。



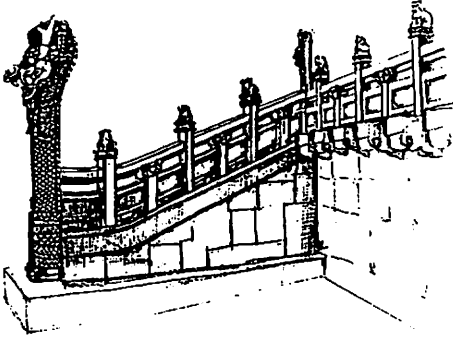
大龍柱・胴体部継面は
四角状である



大龍柱の後方にある欄干部も、各部の形状は四角柱を基本としている。（西村原図）

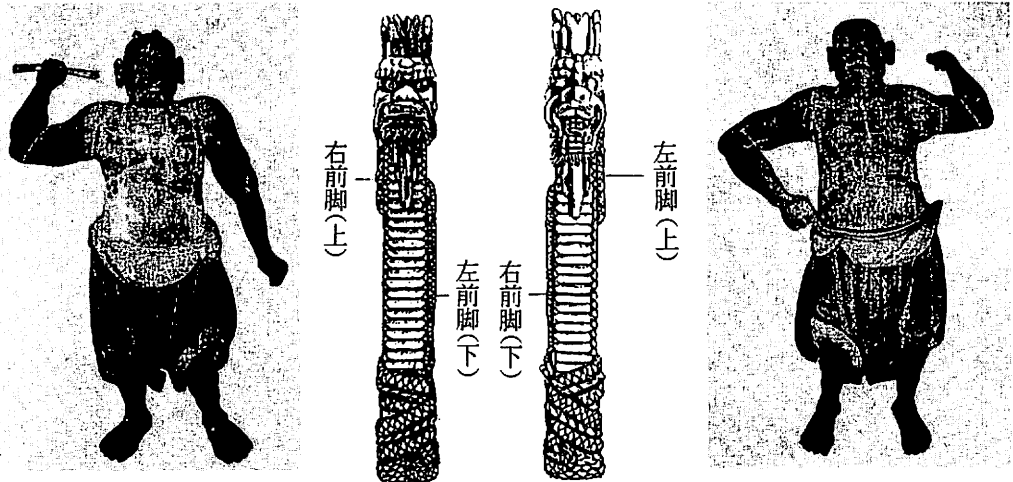
図⑧

鎌倉芳太郎（大正12年頃）、坂本万七（昭和10年頃）撮影の写真では、大龍柱の後方の欄干部の柱には「ほぞ穴」があり、その欄干の笠石、羽目石、地覆石、獅子像が載る親柱の形状が四角柱状と言う事から判断して、大龍柱の胴体部の四角柱状と関連があると推測する。また小龍柱が、同形態で欄干と一体化して繋がれていることも裏付けになる。



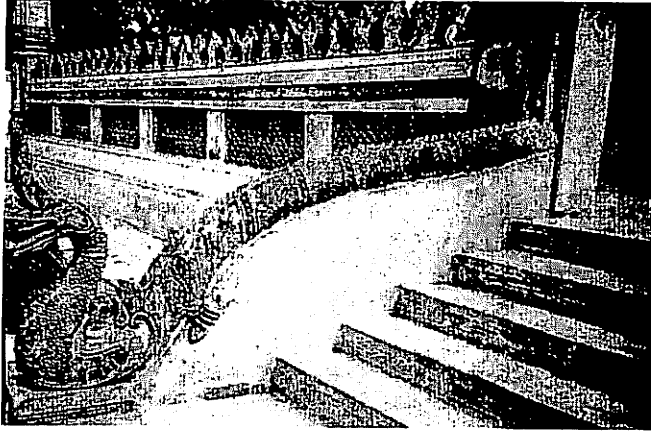
図⑨

四角柱状の垂直に立つ龍柱の形態から判断すると、大龍柱は後方の欄干各部に組まれると考えられる。(西村原図)



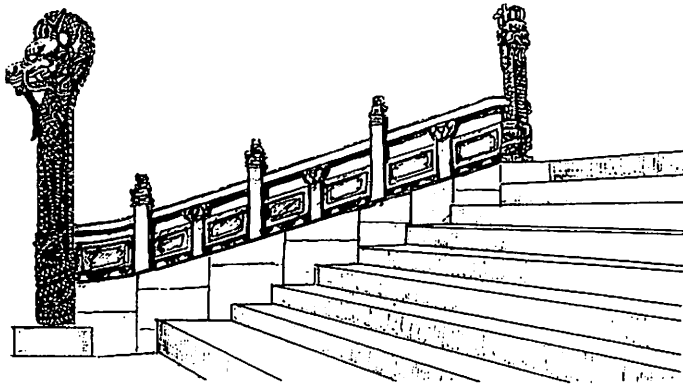
写真⑨

龍柱に阿形・吽形を取り入れ、前脚に上下のかまえを作っている形態は、石垣市・桃林寺の仁王像^⑧とも一致する。阿・吽の構えの態勢の外側が上に上げた手(脚)で、内側は下に構えている。龍柱は外側の脚に宝珠を握っているが、仁王像は金剛杵(桃林寺の阿形には持物は無い)を持っている。この仁王像は乾隆3年であり、首里城正殿の再建は乾隆33年である。構えと守護の発想は一致し、同時期のものといえる。



写真⑩ ラオスの宮殿

宮殿の階段両袖は、龍が這っているような形態で具体的に造られている。それは弧を描き勢いがあり、頭部を持ち上げて威嚇している態勢である。

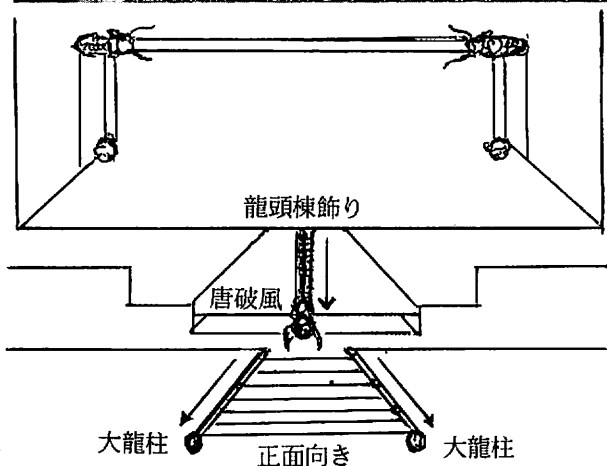
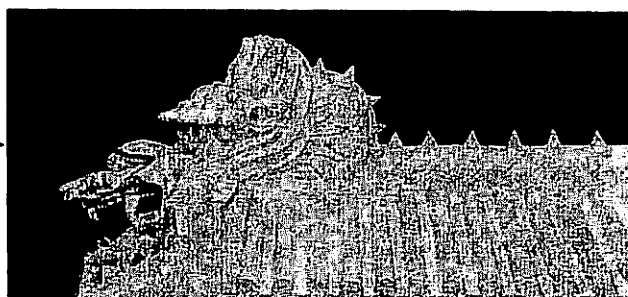
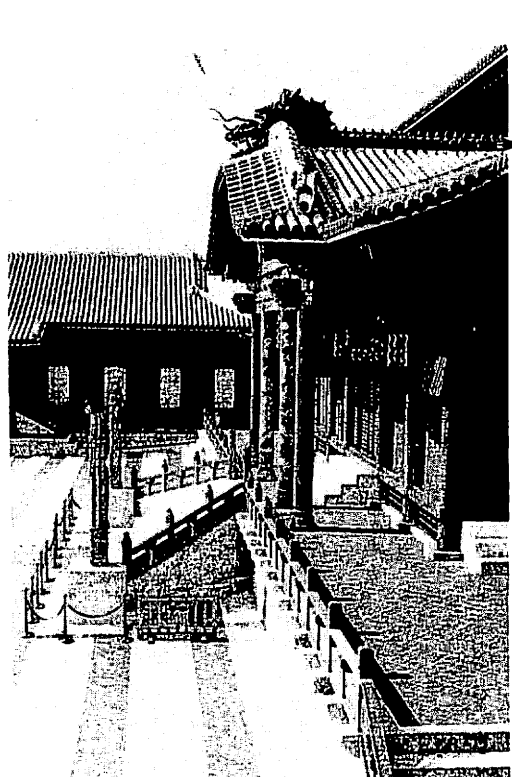


図⑩

龍柱の背面（背骨）には欄干がつながっている。これは流れや方向性を示すと考える。龍柱のとぐろを巻き、鎌首を構えている態勢を考えると背面につながる欄干は、龍が這ってくるという想定がなされていると考える。形態的には激しい内容をもっていながら欄干と組むように一体化された龍の形には、首里城正殿にしかない美意識があると考えられる。（西村原図）

四つ目は、唐破風の棟が龍の胴体として造られ、御庭（正面）に向かって構える龍頭の棟飾りが上げられる（写真⑩）。龍が一体で表されているの

はこの位置だけであり、建物の中心に位置づけられる重要な箇所でもある。



正殿の平面図

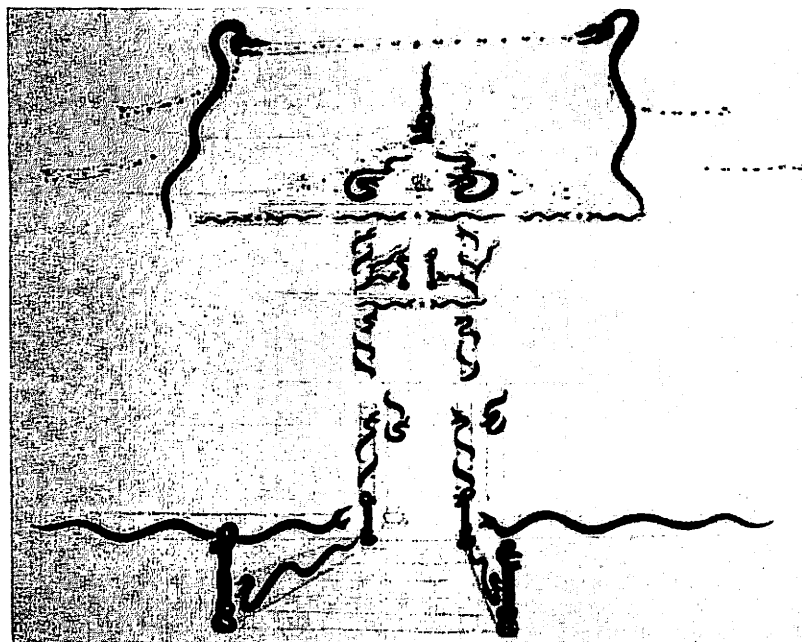
唐破風の龍頭棟飾りと大龍柱の位置と方向

写真⑩

これまでの三つの様式は、阿形・吽形の対で龍を表しているが、唐破風の屋根の棟の龍は棟を胴体として、二階の屋内から這い出るように御庭に向かい構えている。ここは建物の中心であり、大きな口を開けて構える龍が象徴的に作られているが、その龍の前脚を連想するのが正面階段の末広がり欄干部である。この龍頭棟飾りに対応させているのが妻飾りの火焰宝珠であると考えられる。

首里城では、この様に四つの様式を用いて龍の配置がなされている。これら四つの様式から推測すると、宝珠双龍瑞雲文の中心部(宝珠)に向かって左右から相対する図式は、左右の関係を作り、「気」を中心へと向かわせている。また、上下には柱に螺旋状に上っていく龍の構えにより関係をつなげ、さらに正面性の構えを作る唐破風の龍頭棟飾りに龍の構成の一端が収束する。龍の構成の

もう一端は、正面階段等の末広がりの流れを汲む形で、大龍柱が御庭へと向かう。筆者はこの流れを龍脈（図⑩）と名付けたが、龍の流れや方向性を関連させ、「気」のもつ意味合いからも十分に工夫された正殿全体の構成である。龍柱や龍頭棟飾りの形態が、激しく気迫に満ちた態勢でありながらその様に感じさせない所に、抑制された首里城の美意識があると考えられる。



りゅうとうむねかざ
龍頭棟飾り

から はあ ふう
唐 破 風

二階・^{ウサスカ}御差床

一階・^{ウサスカ}御差床

こう はい ばしら
向 拝 柱

しょう りゅう ちゅう
小 龍 柱

だい りゅう ちゅう
大 龍 柱

図⑪ 首里城正殿の龍脈の流れ (西村原図)^①

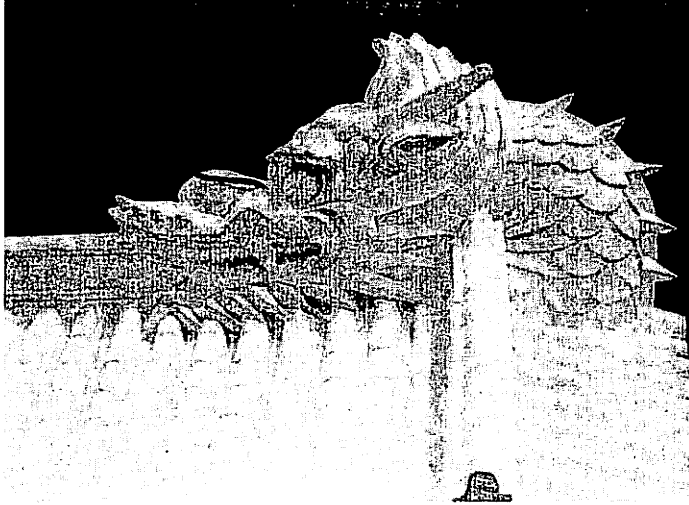
龍の配置から想定すると、左右から中心へ、
中心から前方へと流れがある。

3. 龍頭棟飾りの形態

龍と宝珠の関係を作りながら、龍柱や大棟と唐破風の龍頭棟飾りは独自の形態を持っている。いずれも頸に勢いを与え、生命力を感じさせているが、龍柱には動的でありながら柱という機能から来る抑制された美意識がある。

大棟の龍頭棟飾り(写真⑫)にも一般には知られてない側面がある。この棟飾りは、頸と頭部で表されているが、形態には激しい内容が含まれて

いる。頸の曲勢は、大棟に力強く食い込んでいるように暗示を与える形態で、棟を噛んでいく口辺部へとつながっている。ヘビ類を研究している者からの示唆では、ヘビは獲物を捕らえるとき、下顎を当ててから牙を刺すと言う(写真⑬)。この事は、この龍頭にも該当するのである。顎が棟に食い込むように造られていて、低い態勢で睨み付けるように宝珠に向かっていて、たてがみや角等にも勢いを与えている工夫は、首里城正殿独自のものとする。



写真⑫ 龍頭棟飾り（縮尺石膏像・西村製作）

明治・大正時代の最も原形を止めている形態を分析して復元する。頭が曲勢を描き、その勢いで大棟を噛んでいく様子を表している。



写真⑬ ハブが獲物を捕らえる瞬間を表している。④

ハブが獲物を捕らえるとき、下顎を先に獲物に当ててから上顎の牙を刺すと言われる。この生態の特徴が龍頭棟飾りの下顎と大棟を噛んでいく様子や頭の曲勢からうかがえる。

4. 龍の正面性（フロンタリティ性）

正殿の建物は、御庭に向かって唐破風が造られ、それによって華やかさを作っている。唐破風は室

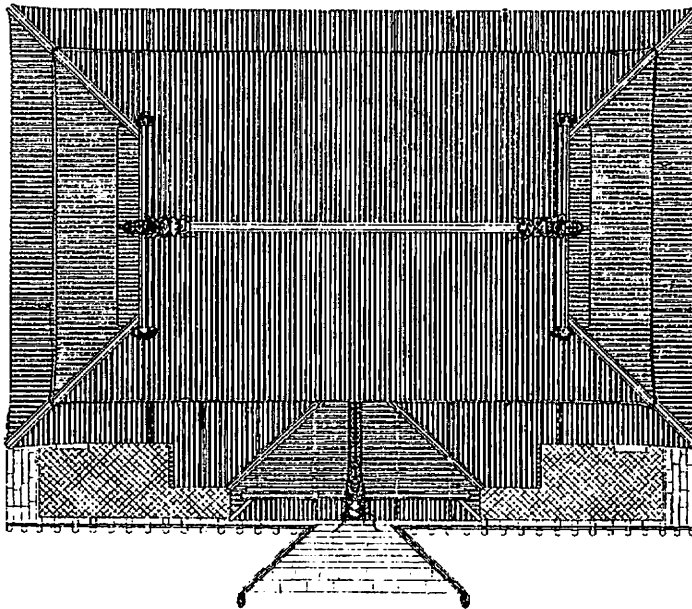
町時代に最も流行した日本の建築様式である。一方、正面の石造りの欄干と階段は中国等でよく見られる造りである。石組の欄干に獅子像が置かれている事や唐破風の位置づけから見ても、建物の

正面という通常の構えはうかがえるが、ここにあえて龍と宝珠を組み合わせている所に注目したい。

まず、唐破風の妻飾りの中心部には大きく火焰宝珠が位置づけられ、その左右から阿・吽形の龍が向かい合うように配置されている（写真④）。また、唐破風の屋根の中心部には、龍頭棟飾りが正面に向かい構えている。一般には、龍頭棟飾りと言われているが、正確には龍の頭部だけが造られているのではなく、胴体部があり、しかも頸をもちあげて構える態勢をとっているのである（写真①）。二階の屋内から這い出るように造られている龍の胴体は、屋根の棟になっているが、前脚

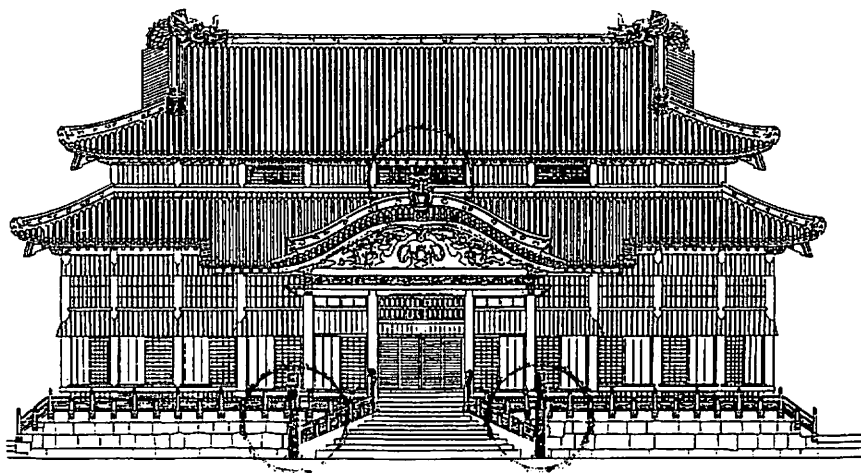
は造られてない。その前脚を暗示させているのが末広りの欄干部、前脚を広げて構える末端が大龍柱とも考えられる（図⑫）。火焰宝珠を中心に据え二階の屋内から屋上に突き抜け、正面に向けて構える龍（龍頭棟飾り）と末広りの欄干部の龍（阿形・吽形の大龍柱）の三点（図⑬）は、正面性を意識した構えであり、火焰宝珠と龍との位置関係を明確に打ち出した構図を作っている。

また、この構図を作る正殿の建物はコンパクトな造りでありながら、末広りの階段を造ることによって遠近感を増し、御庭に広がる空間も造られ、正殿全体を大きく見せる工夫となっていると考える。



図⑫ 正殿・平面図[®]

唐破風の龍頭棟飾りでは、棟が龍頭の胴体になっている。その龍の前脚を暗示するのが末広りの欄干部であり、その末端に大龍柱がある。



図⑬正殿・正面図^⑧

大龍柱を正面に向けると、唐破風の龍頭棟飾りととの三点（○印）の位置が正面性を強調した構図になる。

首里城正殿は左右対称形の建物であり、その正面性を龍や獅子像の配置によって強調している。正面には龍と獅子像を交互に取り入れて構えを作っているが、それを最も強調しているのが唐破風や末広りの階段や欄干であり、その中に大小の龍柱の構えを取入れている。唐破風の中心の龍頭棟飾りと末広りの欄干の末端に位置づけられている大龍柱は、三角形を描いている。この三点は、正面向きを強調する構図である。

おわりに

首里城正殿には、見ただけでは気付かない意匠がある。その中で最も顕著であるのが龍で、その形態は、一定の様式ではない。例えば、素材として石、木、陶を使用しているが、それぞれの特質を活かし、形態にも工夫が凝らされている。屋根の龍頭は陶という素材の特色を生かした形態をとっているし、正面の欄干部には石材の組み合わせによって大小の龍柱という独特の形態を造り上げている。いずれも、その構成は、宝珠との関係をもとに組み合わせられているところに正殿の特性がある。

正殿の建物は、左右対称形をなし、正面性のある構えを作っているコンパクトな宮殿である。その左右対称形の建物では唐破風や末広りの階段・欄干部等が正面性をとっているが、それをさらに強調させるように組み合わせられているのが龍の配置である。また、その形には、阿形・吽形という構えの構図を徹底して取り入れている。その構えは内的には生命感のある激しいものを持っているが、それを各部の形状に合わせて溶け込ませているところに首里城正殿の素晴らしさがある。

この稿では龍と宝珠を中心に取り上げたが、龍の配置にはかなり工夫された形態を活かしての流れがあり、これを読み取ることが首里城を理解す

るきっかけをつくると考える。なお、この拙論を著すに当たり、写真・資料の提供や助言をくださった関係者に深く感謝を申し上げます。

参考文献

- ① 「首里城正殿の彫刻（龍柱等）の意味するもの」西村貞雄著 1994年3月 沖縄県立博物館機関誌「博友」第8号
- ② 「琉球金石文拓本集成」昭和56年3月 沖縄県立図書館編 琉球文化社
- ③ 「琉球王府 首里城」総監修・海洋博覧会記念公園管理財団 1993年5月 (株)ぎょうせい
- ④ 「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」1768年 沖縄県立芸術大学蔵
- ⑤ 「中國美術全集建築藝術編1 宮殿建築」中國美術全集編輯委員會編 中國建築工業出版社 1987年12月
- ⑥ 「国宝建造物沖縄神社拝殿図」1933年 文化庁蔵
- ⑦ 「沖縄文化の遺宝」鎌倉芳太郎著 1982年10月 岩波書店
- ⑧ 「坂本万七遺作写真集 沖縄・昭和10年代」1982年2月 新星図書出版
- ⑨ 「沖縄美術全集5」沖縄美術全集刊行委員会 沖縄県イムス社 1989年11月
- ⑩ ラオスの宮殿（写真提供・片岡 淳氏）
- ⑪ 昭和11年頃沖縄県からドイツに送られた絵葉書から（ボン大学所蔵、祝嶺恭子氏提供）